

東京バッハ合唱団 月報

[第 595 号] 2012 年 1 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.595

January 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

バッハ《口短調ミサ曲》 創立 50 周年記念公演 [1]

第 106 回定期演奏会を終えて

大村 恵美子

地は ほろび砕けよ
われは ここに 立ちて歌(うと)う
み力 支えたもう われを
大地も 奈落も 黙(もだ)さん
今なお どよめけど
(バッハ・モテット „Jesu, meine Freude“ 第 5 節)

この光景は、詩の世界の中ではなく、日本国土の現実の出来ごととして、私たちにふりかかってきました。原発から八方に放射された異物は、全土の空・陸・海を蔽い、なすすべなく人間を汚染のただ中にさらしたままに 9 か月がたちました。

12 月 3 日の東京で、《口短調ミサ曲》はさいわいにも成功裡に終り、その演奏活動の中で、私たちは、福島の子もたちを守る署名を集め、カンパを募りました。署名には北海道・九州からも約 300 名が応じ、10 万円の支援金が寄せられてきました。それぞれの持ち場で、応分の支援をしておられる方々が、この合唱団の呼びかけにも心を開いてくださったのは、この日の「地に平和」のメッセージにもまことにふさわしく、主宰者として深く感謝申し上げます。

新年には、1 月 7 日から数日間、上記の託されたものを届けに、また知人方との連帯をもとめて、私は仙台、福島を訪ねてきます。

バッハの音楽は、ますます冴えわたって、私たちの上をいっそう鮮やかに照らしつづけていることを痛感させられた年末となりました。

2012 年 7 月 1 日こそは、当合唱団のまさに創立 50 周年。もろもろの期待が成就される輝かしい年となりますように。

[第 106 回定期演奏会の記事は、次ページ以降につづきます]

BACH-CHO
R TOKYO
50
1962-2012

東京バッハ合唱団
2012 年 7 月 創立 50 周年

第 106 回定期演奏会 (創立 50 周年記念公演 [1])

2011 年 12 月 3 日、杉並公会堂大ホール

(口短調ミサ曲) 日本語演奏・初演

< 出演 >

光野孝子 S、佐々木まり子 A、鏡貴之 T、新見準平 B

草間美也子 Org

東京カンタータ室内管弦楽団、東京バッハ合唱団

大村恵美子 指揮/訳詞

下写真、《口短調ミサ曲》最終曲 平和をわれらに を歌う



来聴者からの反響

高梨公明様（団友、春秋社）

・言葉を越えたバッハのメッセージ

今日は素晴らしいコンサートをありがとうございました。

とても感銘を受けました。いまごろ皆さんで打ち上げの美酒に酔い浸っておられることでしょうか（さっき帰社して、いま夜7時です）。大きなコンサートを見事に成し遂げた充実感で、興奮冷めやらす……、目に見えるようです。

この日集うたお客様も、とても共感していましたね。アンコール（客席も交えた合唱）の「平和をわれらに」にいたっては本当に感無量でした。私もバス・パートをなぞっておりまして。思わず込み上げてきて、涙が出そうでした。グローリア頌の「地に平和を」も、ことばがまさしくぴたっと合っていて、ぞくぞくしました。「待ち望む」のところも。日本語で歌うと、一層ドラマティックになりますね。言葉を越えたバッハのメッセージが迫ってくるかのように……。

大村先生の指揮のお姿は、ことのほか印象的でした。ご指導されてきた成果をこの日に！ という思いが込められたお姿……。さぞかし練習は並々ならぬものがおありだったでしょう。合唱団の方達の意気込み、多くの練習を経て今日を迎えたという清々しい歌い姿を感じました。

とにかく、東京バッハ合唱団 & オーケストラの真からの協働でなされた「響き」= 迫力といったものが伝わってきました。これは今日の聴衆全員が思うところではないでしょうか。というわけで、なにかとても勇気をいただきました。どうもありがとうございます。

菅原文子様（元団員）

・第一声、バランス良く徹った声

降臨節（待降節）に入って、その週の土曜日に《口短調ミサ曲》を聴くことができました。

事前に送ってくださった「手引き」に目を通していましたので、いろいろ注目しながら臨むことができました。Bach が生涯をとおして手直しをしたことなど。そして、日本語での初演。

合唱が始まったとき、各パート、バランス良く徹った声に引き込まれていきました。さすが、ドイツでの演奏の賜物ですね。友人は第一声から感動したと言っていました。最後の「平和をわれらに」、気持ちよく歌わせてもらいました。ただし、事前にノドを温めておけばよかったときり。

今年の最後の月に、素晴らしい演奏に触れることが

できまして、ありがとうございました。お体に気をつけて、良いシーズンをお迎えくださいますように。

鈴木達也様（団友、スタインウェイ・ジャパン会長）

・音一つ一つにバッハの深い音楽

今日は素晴らしいバッハの《口短調ミサ》を聴かせて頂きありがとうございました。音一つ一つにバッハの深い音楽が現れ、感動しつつ聴かせて頂きました。

最初から音取りせずに合唱が入るだけでも大変なことと思いますが、そこまで音楽を配慮されていて、合唱をするものにとって頭が下がる思いです。

来年以降のご計画も膨大で、どうぞご自愛の上お続け下さい。

奥島 治様（朝日 6/27 の記事をみてご来聴）

・日本語違和感なく、思いを新たに

良い演奏会でした。2 時間余が短く感じました。

バッハは音声を楽器として表現すると思っていましたが、日本語で歌っても何の違和感もなく聴くことができ、思いを新たにしました。

素人ながら、バッハのミサ曲などはコーラスと楽器が全体の構成を司り、独唱は繋ぎのボタンだと（「コーヒーカタータ」、「農民カタータ」などは別として）感じました。その意味でコーラスの人達の練習の成果は素晴らしかった！ 益々のご発展を祈ります。

アンケートより

演奏全般について

- ・バッハの深遠な世界を満喫することができました。すばらしい演奏、歌唱でした。
- ・年々うまくなっていて良かった。
- ・気持ちよく感動できた。少人数でも声がよく通っていた。低音部がすこし弱い。
- ・演奏まことに見事。期待を上回った。
- ・素晴らしい！！ 感激しました。合唱もですが、何といても演奏（トランペット、ブラボー。フルート、美しい）すてきでした。たいへん魂に響きます。私も歌いたいです。
- ・後半、盛り上がりました。
- ・すばらしかった。ありがとうございました。フィナーレが特に。
- ・待降節に、このように素晴らしい音楽を聴くことができ、感激あるのみです。
- ・初めて聴きました。荘厳な感じを受け、とても満足しました。

・合唱の出だしのバラツキがすこし気になりました。
・温かみがあり、格調も高い演奏でした。合唱の響きはやわらかく、あたたかでした(ニケア信経の13,14曲は少し音程が心配でした)。

とくに、日本語演奏について

- ・意味がよくわかり、よかったです。
- ・口短調ミサの日本語は初めてで新鮮でした。
- ・素晴らしい。ご努力に敬意と感謝を申し上げます。
- ・まったく違和感がなかった。
- ・アリアの歌詞はよく聞き取れました。
- ・日本語が生きて聞こえる部分があるのが良い。終曲の日本語はすごく良い。
- ・音量は多くないが、響きが良かった。前半と「平和をわれらに」が素晴らしかったです。
- ・ソリストの方々は、よく日本語が聴きとれました。アルトすばらしかったです、とくに22曲(小羊)合唱14曲(十字架に)、歌詞と内容が表現にぴったりで感動しました。
- ・原語から日本語へ、違和感なく、ずっと入ってきました。とくにフィナーレの「平和をわれらに」。ことしは特にそう祈ります。
- ・日本語演奏、すばらしいチャレンジですね。もっと広まってほしいです。
- ・対訳を見ないで楽しめる点、ことばの意味を味わえる点が良いと思いました。
- ・外国語で聴くのも一つですが、やはり日本語で内容がわかって聴くほうが一段と楽しかった。歌の内容がわかり、聖書の箇所も思いだされました。
- ・感動しました！ バッハの祖国の方々と同じバッハ体験を日本語でできる、それをして良いのだ...と、今日の大村先生の文章から教えていただきました。それをずっと夢みていました。
- ・ストレートに心に届く感じです。
- ・洋の東西を問わず、自国語で演奏することは大変すばらしいことです。歌詞の内容が全体的に理解でき、聴衆に感動を与えますと思います。
- ・原語だと雰囲気は伝わりますが、日本語は深いところに入ってくる感じがします。

その他、本日の運営全般、会場について等、何でも。
・「手引き」がとても役立ちました。
・字が読める程度に、客席の照明を配慮してほしい。
・最後の聴衆への呼びかけは、マイクを使ってください。うしろは全く聞こえません。
・この合唱団の有意義な活動を維持するため、ファンが重要だと思います。
・聴衆も奏者も一体になった会場と感じました。またチャンスがあれば聴きたいと思います。

東京バッハ合唱団創立 50 周年

バッハ合唱団をとりまく人々

[第8回(最終回)]

大村 恵美子

昨年(2011年)の2月号「月報」から、これまで7回にわたって、旧著(1992年刊『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』)に登場する171名の方々のご紹介をつづけてきました。最後に、残る68名の方々をひろって短くご紹介し、創立30年の間に、この合唱団がどんなに多彩な分野の方々から交流をいただいていたかを振り返ってみることにします。

これにつづく、1992年以降に合唱団に加わった方々、一緒にさまざまな活動をつくりあげてくださった方々は、もっともっと多く広がってしまい、見届けられるかどうか見当もつきません。私見では、月報寄稿者にかぎってまとめてみようとも考えていますが、とにかくここでは、『三十年の歴史』という枠内での記述を、完結することにしましょう。

ここでは、68名の方々を分野に分けて、『三十年の歴史』での掲出順に、接点のみ紹介させていただきます(左の数字は、同書掲出ページ。肩書きは、わかる範囲で最終のもの)。

< 音楽関係 >

22 野坂陽子(1962年11月10日、当合唱団の第1回公演でソプラノ独唱)、木村宏子(同アルト独唱)、山田実(同テノール独唱。団友)、池上恵三(同バス独唱)
30 東川清一(バッハ学者、東京学芸大学名誉教授)、原恵(日本キリスト教団讃美歌委員会、「礼拝と音楽」編集)
42 堀江孝子(ピアニスト、1963年1月14日、美術家会館での当合唱団披露演奏会で独奏)
58 富永哲郎(オルガニスト、玉川大学教授)、松原茂(オルガニスト、指揮者、宮城教育大学教授)、両氏の「オルガンとカンタータの会」で、当合唱団の第1回公演をさせていただいた。

年始の練習開始・・・参加、見学、いずれも歓迎。

1月14日(土)15:30 17:30、世田谷中央教会

1月16日(月)18:30 20:30、目白聖公会

・練習曲目:《マタイ受難曲》

・楽譜:ベーレンライター社、新バッハ全集版

・日本語訳詞:コピー譜あり

お問い合わせ=事務局(当「月報」タイトル内に連絡先)

東京バッハ合唱団 < 創立50周年記念ファンド >

報告 : 2011年10月12日現在

募金達成額 : 1,000,000円(応募55人)

60 角倉一朗(バッハを中心とした音楽学者、東京芸大名譽教授)
81 多田逸郎(リコーダー奏者、教育大付属高校教諭。団友)
106 木村一子(オルガニスト、1966年仙台演奏旅行で伴奏担当)
127 渡邊暁雄(東京都交響楽団監督、指揮者)
137 木岡英三郎(オルガニスト、多数のバッハ・カンタータ日本語訳も出版)
162 小栗静子(ピアニスト、筆者の高校同級生)
168 市田儀一郎(ピアニスト、日本ピアノ教育連盟副会長、平成音楽大学教授)、市田キヨ子(当合唱団にソプラノ独唱者として出演、武蔵野音大講師)
173 大橋敏成(ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者、上野音楽大学名誉教授)
201 西川秀人(ピアニスト、大学在学中に当合唱団練習伴奏者、東京芸大講師)
228 高橋悠治(ピアニスト、1982年6月、西武スタジオ200「マタイ受難曲」連続講座に出演)
231 小林裕(オーボエ奏者、筆者とゲーテ・インスティトゥートの同グループ)、岩花秀文(フルート奏者、同上)、樋口隆一(音楽史・評論・指揮など広く活躍、明治学院大学教授。団友)
260 ゲルト・テュルク(テノール歌手、ゲヒンガー・カントライ出身)
273 ジゼル・ティリエ(ゲヒンガー・カントライ団員として、リリング氏と共に来日)
277 山本由香子(オルガニスト、1983年第1回ヨーロッパ演奏旅行でアシスタント、1985年国際バッハ音楽祭に筆者と同行)

<教育・施設関係>

27 古市辰威(筆者の小学校4~6年時の担任教諭)
30 八木誠一(聖書学者、東京工大名譽教授。団友)
35 箱田きよ(「かにた婦人の村」寮生)
37 深町辰夫(1962年練習場増設で棟梁役、聖学院高校教諭)
38 関根隆光(元後援会員、順天堂大医学部名誉教授)
42 式場隆三郎(精神病理学者)
61 池田広一(美術家会館初代館長)
83 桜林仁(心理学者、東京芸大講師、『音楽の精神分析』を筆者と共訳)
136 安藤タカ(筆者の高校時代の音楽教諭)
138 アーネスト・サトウ(アメリカ文化センター音楽講師。明治時代の英国公使とは別人)
149 秀村欣二(西洋史学者、東大名譽教授)、須藤哲生(仏文学者、明治学院大学名誉教授。団友)
206 萩原繁(筆者および小田島雄志らの小学1年時の担任、満州白菊小学校)
209 小山弘志(国文・漢文学者、東大名譽教授)、大森

莊蔵(哲学者、東大教授)、荒木昭太郎(言語情報学者、東大名譽教授)
222 戸口幸策(音楽学者、西武スタジオ200「マタイ受難曲」連続講座監修、成城大学名誉教授。団友)
228 小田切啓一(西武スタジオ200担当者、元後援会員)、佐治晴夫(物理学者、JAXA宇宙連詩編纂委員会、鈴鹿短期大学学長、スタジオ200「マタイ受難曲」講座出演)
250 本間一夫(日本点字図書館創設者)
232 鍵山松彦(国際文化出版社社長)

<キリスト教関係>

29 十時英二(日本キリスト教団千歳丘教会牧師)、十時久枝(英二牧師夫人、当合唱団初期の月報作成の協力者)
30 小泉功(日本キリスト教団讃美歌委員会、「礼拝と音楽」編集)、赤岩栄(上原教会牧師、月刊誌「指」発行)
38 磯部敏郎(日本キリスト教団敷島教会牧師)
84 佐々木厚(目白聖公会司祭、牧師)
154 松田孝一(聖学院大学教授、讃美歌委員会)
183 金井久(神父、東京カテドラルで行われた磯谷威氏追悼ミサを司式)
213 シスター野崎(長崎レデンプトリスチン修道女、「声の奉仕会マリア文庫」)
221 熊野義孝(日本キリスト教団武蔵野教会牧師、東京神学大学教授)、熊野清子(武蔵野教会牧師)
238 テムペリーニ神父(山梨県教会一致懇談会会長)
245 大村善永(日本キリスト教団シロアム教会牧師、日本盲人キリスト教伝道協議会元議長)、大村栄(阿佐ヶ谷教会牧師、団友)
247 生島陸伸(カンバーランド長老教会高座教会、海老名シオンの丘教会牧師を経て牧会塾、軽井沢恵シャレー)
297 中嶋正昭(牧師、日本キリスト教協議会総幹事、アジア学院元理事長)

<友人>

164 佐藤千支子(カフェハウス・バッハの経営指導に当たられた税理士)
206 宮島信子(筆者と小田島雄志の小学1年時の同級生、後援会員)
213 藤岡幹隆(長崎聖文舎、1980年の長崎演奏旅行を企画・推進)
248 辻光典(漆芸家、1982年の創立30周年記念《マタイ受難曲》ポスター制作)
277 中島弘行(元後援会員、1985年国際バッハ音楽祭に同行)、坂下信之(同上、ばっはめいとフルート受難者、カフェハウス・バッハ常連)

<完>